

ふ り 返 っ て 考 え よ う

校長 森 和 久



「2月の生活指導の目当
ては「ふり返って考えよう」
です。学年末を控え、1年
間をふり返って、新たな学
年に向かおうという趣旨で
2月の目当てにしていま
す。

先月記載した「個別最適な学び」において重要と言われている「自らの学習の調整」のために、「ふり返り」は欠かせません。今の自分の現状を客観的に分析・判断することが、自分の学びをコントロールする第一歩だからです。

したがって、日々の授業でもその時間の最後、その単元の最後には、「ふり返り」を行うことが通例となっています。そして、その学習で、何が興味深かったか、楽しかったか、何が分かったのか、何が出来るようになったのか、分からなかったこと、出来なかったことは何か、学んだことを今後どう生かしていこうか、今後どんな点に気をつけて学習をすればよいかなどを、書くようにしています。

「ふり返り」が適切にできると、自分の現状と課題が明確になり、今後の計画が立てやすくなります。しかし、「適切に」できるということは、大人でも案外難しいもので、自分を過大評価する、過小評価する、自分に都合のよい分析をする、課題の原因を見誤るなどのことが往々にして起こります。

例えば、分かりやすい例として、算数のテストが振るわず、原因を分析し、次の学習計画を立てるという場合を想定して考えてみます。

世間で「A ということを行う人は、行わない人より算数のテストの結果がよい」と言われていて、それが事実と判断できる場合、「A をすればテストの点がよくなる」と考えがちですが、言うまでもなく「A と算数のテストに正の相関関係がある」ことと「A が算数

のテストを向上させる原因である」という因果関係とは異なります。算数が得意な人は「A」ということを行いがちであるというように、「算数のテスト」の方が原因である可能性もありますし、あるいは別の「B」ということと「算数のテスト」に因果関係があり、「B」と「A」に正の相関関係があるため、「A」と「算数のテスト」だけを見たときに因果関係があるように見えてしまうということかもしれません。この場合、「『A』を行うことが必要だ」と判断して、一生懸命「A」を行うことは、結果的に無駄な努力ということになる可能性があるわけです。

「因果関係があるかどうか」は極めて確定しにくいことがらです。したがって、安易に原因を決めつけないう冷静的な態度が必要になります。けれども因果関係が確定できない場合、原因が確定するまでは対策も考えられないと考えるのも実情に合っていません。物事は多くの要因が複雑に絡み合っており、そもそも一つの原因が特定できることが少ないですし、ましてや個人差があるので、「多くの人」に因果関係が成り立っていても、自分はその例外かもしれません。したがって、「はっきりしないから何もできない」と考えるのではなく、例えば「C をすることが有効かもしれない」と仮説を立て、それを実行してみて、さらにそれをふり返って修正するというように、とりあえずやってみて試行錯誤するという姿勢が大切になります。

ふり返りを、論理的、批判的、客観的に行うとともに、絶対的な一方法に決めつけることなく、柔軟に粘り強く試行錯誤していく姿勢を、学習する中で身につけてほしいと思います。そして、そういう姿勢こそ将来に役立つことだと考えます。

新型コロナウイルスの感染状況が悪化しています。今後とも十分に気をつけ過ごしていただくとともに、体調が優れない場合は無理をせず、登校を控えるようにお願いします。